

『判断力批判』における「美感的価値 Ästhetische Werte」に関する一試論
—いかにして芸術には価値がありえるのか?—

高木 駿 (一橋大学)

I. カントは『判断力批判』の第 53 節「諸芸術における美感的価値エステーティッシュの比較」において、「あらゆる美を扱う芸術の中で、詩芸術 Poesie が最高の地位を占める」(B 326)と述べている。つまり、詩芸術は最高の「美感的価値エステーティッシュ」を持つことになる。もちろん、詩芸術だけでなく、他の美を扱う芸術も、多かれ少なかれこの価値を持つはずである。しかし、カントの美感的価値エステーティッシュへの規定が極めて少ないため、この概念は未だにその妥当性を担保されないまま残されていると考えられる。そこで、本発表では、『判断力批判』における美感的価値エステーティッシュの根拠を示し、その妥当性を確保することを試みたい。

さて、詩芸術が最高の美感的価値エステーティッシュを持つとされる限り、その根拠を辿っていけば、美感的価値エステーティッシュの根拠へ辿り着けるはずである。カントは、詩芸術が価値を持つ根拠として、主に「心にその自由で、自ら活動的、自然の規定に依存しない能力を感じさせる」(ebd.)ことをあげる。この能力は、現象としての自然を、対象それ自体でも、悟性的なものでもないものとして観察し、判定する能力 (Vgl. ebd.)、つまり「趣味」という能力と理解される。すなわち、美感的価値エステーティッシュの根拠とは、趣味が十分に発揮されて充たされている事態にあると考えられる。この際の美の判定は、「関心を持ちえない純粋な Wohlgefallen」(B 205)という態度でもって経験的に示され、規定されている。故に、経験の上では、美感的価値エステーティッシュの規定根拠はこの Wohlgefallen に求められると推論することができる。したがって、この Wohlgefallen が美感的価値エステーティッシュの根拠として正当であることが明示されれば、この価値自身の妥当性も示されることになるだろう。

ところで、G. シェーンリッヒは、最近の自身の価値理論 (2009 年-) の内で、カント哲学一般における Wohlgefallen が価値の規定根拠になりえるかどうかについて、その「妥当性 Angemessenheit」という面から、いわば「超越論的」に説明することを試みている。この理論は、Wohlgefallen の類型にかかわらず、カントの価値一般に対して適応される可能性を持つので、関心を欠いた Wohlgefallen が美感的価値エステーティッシュの規定根拠として妥当することを証明する際にも十分に機能するはずである。そこで、本発表は、先の目的の遂行のために、彼の見解を指針として導入したいと思う。また、そうすることによって、本発表は世界のカント研究の最先端へとコミットする意義を持つことにもなるだろう。

本発表の構成は以下ようになる。まず、美感的価値エステーティッシュの根拠が関心なき Wohlgefallen に求められることを推論する。次に、シェーンリッヒの見解を頼りに、その根拠の構造を分析し、正当化を目指す。そして、芸術におけるそうした価値のあり方を示し、結びとしたい。